

ミュンヘン

2006(平成18)年2月4日鑑賞(梅田ピカデリー)

☆☆☆



監督・製作＝スティーヴン・スピルバーグ／出演＝エリック・バナ／アイエレット・ゾラー／ダニエル・クレイグ／キアラン・ハインズ／マチュー・カソヴィッツ／ハンス・ジシュラー／ジェフリー・ラッシュ／リン・コーエン／マチュー・アマルリック／ミシェル・ロンズデル／マリー＝ジョゼ・クローズ（アスミック・エース配給／2005年アメリカ映画／164分）

……「アカデミー賞作品賞・監督賞など5部門にノミネート」と報じられたスティーヴン・スピルバーグ監督の問題作が遂に公開！ 1972年のミュンヘンオリンピック開催中、現実起きた人質事件に対して、イスラエル政府は断固報復を決断した……。国家とは？ 民族とは？ 家族とは？ 使命とは？ 1人また1人と報復テロが進んでいくにつれ、そんな根源的な問いかけに次第に重みが……。お気軽に楽しむ映画が多い昨今、たまにはこんな重厚な魂の問いかけについて、じっくりと考えてみたいものだ。

イスラエル VS パレスチナ

この問題について私が知っている最近の情報は、第1に、2004年11月にパレスチナ自治政府のアラファト議長が死亡したこと。第2に、イスラエルのシャロン首相が2006年1月5日以降、脳出血で倒れ重篤となっていること。第3に、2006年1月25日に実施されたパレスチナ評議会選挙で、予想に反して(?)イスラム原理主義組織ハマスが圧勝したこと。

ユダヤ人の国イスラエルの建国は、第2次世界大戦後、アメリカの応援によるものであることは知っていても、そのイスラエルとパレスチナがなぜこれほどにいがみ合うのかという問題は、あまりにも根が深すぎるため、日本人にはもっとも理解しにくいテーマの1つ。したがって、この映画が描くイスラエルによる「黒い9月」への報復というテーマも非常にわかりにくいもの。

1972年のミュンヘンオリンピック開催中の9月5日未明、選手村をパレスチナゲリラの一派である「黒い9月」が襲い、イスラエル選手団11人を人質にとった。ドイツ政府の努力にもかかわらず、テロリストたちは全員射殺されたものの、人質の解放はできず、全員死亡という悲惨な結果に……。さて、この結末を見て、イスラエル政府はどのような決断を下したのだろうか？

「目には目を」「歯には歯を」の教えは？

大阪市は靱公園と大阪城公園で、その一部を「占拠」しているホームレスの青テントを強制的に排除するべく1月30日「行政代執行」を実施したが、そのために動員した人間は延べ1,200人以上、そして費用は1,300万円以上。もっともその一部はホームレスに請求すると言っているが、そんな回収が不可能なことは、火を見るよりも明らか。

「生活する場所がないから、仕方なく公園にテントを張って住んでいる」という理屈が成り立たないことは明らかだが、戦後60年間の平和が続く中でトコトン優しくなった日本人たちは、彼らに対する同情もいっぱい。新聞紙上でも例えば大阪市立大学教授島和博氏（社会学）はテント撤去について、「ホームレスと対話路線で」と述べている（2006年2月4日付朝日新聞）。

また、同氏は2月5日（日）午後1時30分からのやしきたかじん司会の『そこまで言って委員会』にもゲストとして出演し、パネラーの攻撃を受けながらも堂々と自説を展開していた……？

こんな優しい日本では、今やハムラビ法典が高らかにうたった「目には目を」「歯には歯を」の鉄則（？）は死語になってしまっている……？

しかし、「黒い9月」による襲撃で自国の選手団11名を失ったイスラエルのゴルダ・メリア首相（リン・コーエン）が下した決断は、そんな今ドキの優しい日本人とは全く違うもの。

その1つは、パレスチナ解放機構（PLO）が拠点を置いていたレバノンへの武力侵攻。

そしてもう1つは、この映画が描く諜報機関モサドに下した、人質事件に関与したパレスチナの首謀者たち11名の暗殺命令。まさに「目には目を」「歯には歯

を」の言葉どおりの対処だが、その正当性は……？

「家族の絆」が大テーマ……

スティーヴン・スピルバーグ監督の『ミュンヘン』直前の作品が、ちょっと評判の悪かった『宇宙戦争』（05年）だが、この両者とも、底を流れる大テーマは「家族の絆」。

妊娠7カ月の妻ダフナ（アイエレット・ゾラー）とともに子供の誕生を心待ちにしているアヴナー（エリック・バナ）は、イスラエル秘密諜報機関「モサド」の一員。しかし映画を観ている限りでは、それほど職務熱心とも思えず、どちらかというとする気やファイトは内に秘めたタイプ……？

そんなアヴナーだったが、メリア首相から直々に任務を与えられるとやはりそれに従わざるをえないことに。しかしそれは、本当にその任務の正しさを確信したためだろうか？ そう疑うのは彼に対して失礼で、たしかに当初はそうだったかもしれない。

しかし、人質事件に関与したパレスチナ的首謀者たちを1人また1人と暗殺していくにつれて、アヴナーの気持は揺れ動くことに。そんなアヴナーが最後にたどり着くもの、それはきっと家族の絆……。

ちょっとイヤな上司だが……？

メリア首相からの命令を執行するについて、アヴナーの直属の上司になったのがエフライム（ジェフリー・ラッシュ）。優秀な上司らしくアヴナーに対する指示は的確だし、その後の報復テロ実行中の5人に対するフォローもバッチリ……？ しかし、ちょっとイヤな感じがするのは、人間的な冷たさを感じさせるため……？

そもそも報復テロが「モサド」の手によるものと感づかれたらヤバイわけだから、アヴナーたちの行動はあくまで極秘。したがってアヴナーたちはエフライムも知らない人間だという話にすることが大前提。

それはやむをえないと腹をくくって任務を引き受けたアヴナーだったが、やはりエフライムは組織の一員。途中、アヴナーの情報源を明かせと迫ったり、知ら

ないはずの人間に対して「これは命令だ」などと論理的に矛盾する行動に出たり、ちょっと混乱気味……？

5人のチームワークは？

報復テロの実行部隊はアヴナーをリーダーとする5人のチーム。アヴナー以外の4人とは、①車両のスペシャリストのステイーヴ（ダニエル・クレイグ）、②後処理のスペシャリストのカール（キアラン・ハインズ）、③爆弾のスペシャリストのロバート（マチュー・カソヴィッツ）、④文書偽造のスペシャリストのハンス（ハンス・ジシュラー）。これはすべて上司のエフライムの人選によるものだろうが、そもそもなぜアヴナーがリーダーにされたのかもよくわからないうえ、この4人の本当の能力や氏・素性もわからない……。

当初、順調に「仕事」が進んでいる間はチームワークはうまくいっていたが、こんな仕事にはハプニングやミステイクがつきものだから、それが重なってくるど次第に……？ さて5人のチームワークはいつまで順調に続くのだろうか？

いつの間にか狙われる立場に……

アヴナーたち5人チームの任務は、人質事件の首謀者たち11名の所在を探し、これを暗殺すること。資金はタププリと提供されているから情報屋のルイ（マチュー・アマルリック）を通じて買う情報によって、1人また1人と暗殺計画は順調に……。

しかし、暗殺が新聞に報じられると、その犯人探しの圧力が強まるのは当然。ある晩、ホテルのバーのカウンターに座って1人飲んでいたアヴナーに対して、1人の香水の香りを漂わせる美しい女性から流し目が……。明らかな「お誘い」だが、アヴナーはこれをやんわりと断り、ホテルから愛する妻に電話をかけ、生まれたばかりの娘と対話（？）し、涙することに。

そんなアヴナーが気づいた異変は、チームの一員カールが彼女と一夜を共にしようとして殺されたこと。今や任務遂行上のトラブルやミスを通り越して、明らかにアヴナーたちはその生命を狙われる立場になっていたのだった。

情報屋のルイの人物像は？

アヴナーがターゲットの所在を探しあてるうえでアテにしたのはフランス人の情報屋のルイ。ルイは一見紳士風だが、アヴナーたちの暗殺目的を知ったうえで、金と引きかえに情報を提供するのだから、「ヤバイ人種」に決まっている。このルイをどこまで信用できるのか？ それはアヴナーにとって最大の関心事だが、それは仲間たちや上司のエフライムも同じ。しかし映画の中では、この人物像は容易に明らかにならない。

さらにわからないのは、ボスだとばかり思っていたルイが、途中で「パパ」（ミシェル・ロンズデル）に会ってほしいと言いだしたこと。ルイがホントのボスだというこの「パパ」とは一体何者？

暗殺の実行をめぐるアヴナーとルイそしてパパとの間で展開される心理戦と人物評価のあり方はこの映画の1つの軸。きわめて難解なテーマだが、そういう視点もしっかりと……。

たまにはこんな難解な映画をじっくりと……

ハリウッド映画の不振と興行収入の下落は、最近のニュースで再三伝えられている。そんな中、2月3日付日経新聞夕刊は、「米映画 リストラ着手」と伝えしたが、興行収入が下がっていること自体はやむをえない話。

そこで問題は、なぜハリウッド映画の人気に陰りが出てきたのかということ。その原因は私に言わせれば明らかで、つまらない映画、魅力のない映画が多くなってきたことに尽きるはず。

具体的には、映画の素材やネタが限られ、人気シリーズの続編に偏ってしまっている現状が問題だ。それについては映画制作側には問題があることは明らかだが、観客の側にも大きな責任がある。

つまり、観客が単に面白い映画とホントにいい映画との区別がつかなくなっているのではという問題だ。

この『ミュンヘン』という映画は決して面白い映画ではない。むしろ「史実にもとづいた物語を再現した映画」という意味で言えば、単にそれだけのもの。し

かし、あの時代のあの状況の中で、イスラエルという祖国のためにテロの実行という任務を与えられた人間が、どう動いたのかという客観的な人間模様の展開は、実に考え甲斐のあるテーマ。そして真の平和とは何か、を真面目に考えるきっかけになる映画。

もちろんその答えが簡単に導き出せるものではないことは明らかだが、少なくともこういう映画を観た多くの観客がそれを考えるきっかけとなることに意味があるわけだ。

2時間44分という長い時間ずっと神経をすり減らすテロリストたちの行動を観ているのは、そりゃしんどいもの。しかし、たまにはそんなしんどい思いをしながら、テロの恐さとテロへの報復の是非、さらには国家とは？ 人間とは？ という超難解なテーマをじっくりと考えてみてほしいのでは……？

アカデミー賞作品賞、監督賞など5部門にノミネート！

第78回アカデミー賞ノミネートが去る1月31日発表されたが、この『ミュンヘン』は、監督賞と作品賞そして脚色賞、編集賞、作曲賞の計5部門にノミネートされた。今回は珍しく、①『ブロークバック・マウンテン』(05年)、②『カポर्टィ』(05年)、③『クラッシュ』(05年)、④『グッドナイト&グッドラック』(05年)の4作品が『ミュンヘン』と同じく作品賞と監督賞の両方にノミネートされている。この4作品は、私がまだ観ていないものばかりだから、これからの鑑賞が楽しみ。さてその行方は……？

なお、私が最も注目している主演女優賞に①キーラ・ナイトレイ (『プライドと偏見』)、②シャーリーズ・セロン (『スタンドアップ』)、③リーズ・ウィザースプーン (『ウォーク・ザ・ライン 君につづく道』)の3人がノミネートされたのは、私の予想どおり……？ ここで少しその自慢をするとともに、その行方を注目していることを付記しておこう。

2006(平成18)年2月6日記